

1. 戦後家族制度の変革に伴い、住宅における家族構成も従来支配的だった世代家族から核家族へと急速に移行している。これはわが国における新しい家族制度のあり方への展開を示すものであるが、反面、このような核家族化、小家族化に伴い種々の社会的な問題も生じている。例えば老人家族の問題、共稼ぎ家族における子供の養育の問題などである。そこで社会の大勢としては核家族化への移行を前提としつつも、従来世代家族が果してきた家族構成員の相補的な役割—例えば老人が子供の面倒をみるというようなこと—をも再検討してみる必要がある。

2. 二世代の住み方をみると、1) 同一世帯を形成するもの（生計、住居を共にするもの）〔同一世帯型〕 2) 生計、住居を別にするが同一敷地内に居住するもの（ただし同一棟にあっても分離使用できるものを含む〔はなれ型〕 3) 近隣に居住するもの〔近隣型〕 4) 遠隔に分離居住するもの〔遠隔型〕の4つに大別することができる。通常世代家族というものはこのうちの1) ないし2) を指すが、ここでは一般的な二世代間の住み方をとりあげてみたい。そのうちでも特に2) および3) の型についてそれらの成立条件や結果の比較等を事例的に検討することとする。

3. これらの4つの型にはそれぞれの条件に応じておのおの長短があり、それらをいかに住みわけるかということがこれからの国民の居住方式で定立する上で大きな課題となる。